源氏物語における廃墟の風景(2)

青木　眞知子

承前

源氏物語[1]における、邸宅の荒廃の景を表現した典型的場面は、蓬生巻にある末摘花の住む故常陸宮の邸宅描写であろう。光源氏が須磨に退居しているあいだにその邸宅の荒廃はさらに進み、

かかるままに、浅茅は庭の面も見えず、しげき蓬は軒をあらそひて生ひのぼる。葎は西東の御門を閉ぢ籠めたるぞ頼もしけれど、崩れがちなるめぐりの垣を馬、牛などの踏みならしたる道にて、春夏になれば、放ち飼ふ総角の心さへぞめざましき。（蓬生）

というありさまであった。この場面にみるように、源氏物語の風景描写において、このような邸宅の荒廃を表象する景物となっているのが、浅茅、葎、蓬、薄などの植物である。前稿[2]（「源氏物語における廃墟の風景(1)」）では、これらの植物のうちの「浅茅」と「葎」を中心に考察を加えた。その結果、源氏物語に描かれた廃墟の風景における「浅茅」と「葎」との用例において、ありふれた自然の景物の叙景表現のなかに、登場人物の無常の境遇が象徴されているという表現特性を確認した。本稿では、引き続き、万葉集、古今集以来の叙景表現が、源氏物語の廃墟の描写において、どのような抒情化をとげているのかということについて、「蓬」と「薄」の語をもとに検証してゆきたい。

一

「蓬」の用例は、源氏物語では、十二例、「蓬生」の用例は、三例を数える。「蓬」の用例については、十二例中の八例が蓬生巻にあり、この巻の女主人公である末摘花の住む、故常陸宮邸の荒廃の場面に用いられているのである。前述の「しげき蓬は軒をあらそひて生ひのぼる」もその一例であるが、蓬生巻では、源氏の離京後におのずから忘れ去られて困窮の度を増す末摘花の生活がその邸宅の荒廃とともに描

き出されてゆくのである。

巻名にもなっている「蓬生」は、「蓬生ふる所」をいい、雑草の生い茂った所、荒廃した場所を意味する。巻中には「蓬生」の語句はないのだが、この巻の女主人公である末摘花の邸宅が荒れ果てた「蓬生」であることから名づけられたものだと想像される。源氏の庇護下にあってようやく人並みの暮らしを保っていた末摘花であったが、彼の須磨への流離によって、貧窮の様相は刻々と深まり、あまりの邸宅の荒廃ぶりに、召使たちも次々に去って、わずかに訪れるのは兄の禅師だけである。その「恐ろしげに荒れはて」た邸宅の様子は、次のように描かれている。

もとより荒れたりし宮の内、いとど狐の住み処になりて、疎ましうけ遠き木立に、梟の声を朝夕に耳馴らしつつ、人げにこそさやうのものもせかれて影隠しけれ、木霊など、けしからぬ物ども所を得てやうやう形をあらはし、ものわびしきことのみ数知らぬに、まれまれ残りてさぶらふ人は、「なほいとわりなし。この受領どもの、おもしろき家造り好むが、この宮の木立を心につけて、放ちたまはせてむやと、ほとりにつきて案内し申さするを、さやうにせさせたまひて、いとかうもの恐ろしからぬ御住まひに、思し移ろはなむ。立ちとまりさぶらふ人もいとたへがたし」など聞こゆれど、「あないみじや。人の聞き思はむこともあり、生ける世に、しかなごりなきわざはいかがせむ。かく恐ろしげに荒れはてぬれど、親の御影とまりたる心地する古き住み処と思ふに慰みてこそあれ」と、うち泣きつつ思しもかけず。（蓬生）

冒頭の「もとよりあれたりし」という表現は、末摘花の住む邸宅が、父君（常陸宮）の薨去以来荒廃の一途であったという、邸宅の経た時間の経緯を指すとともに、すでに末摘花巻において、十分に語りつくされた荒廃と貧窮の相が、源氏の離京によってさらに深く刻まれてゆくという物語の展開をも暗示するものであると解釈できる。人の住む気配の失せたその見捨てられた邸宅は、「狐の住み処」となり、「梟の声」がして、「木霊」など奇怪なものの数々が我が物顔に姿を現すまでに荒れ果ててゆくのである。

末摘花巻においては、その邸宅や庭の荒廃は、「浅茅分くる人も跡絶えたるに」「かの人々の言ひし葎の門は、かやうなる所なりけむかし」と「浅茅」「葎」の語で描かれていたが、蓬生巻で八例も見いだせる「蓬」が、そこに一例も使用されていない点が注目される。末摘花巻は、帚木巻で語られた、「さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひの外にらうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ限りなくめづらしくはおぼえめ」という左馬頭の中流女性論に基づいて、「葎の門」すなわち零落した人の住む荒廃した家に、思いがけず美女を見出す幻想の具現化を末摘花に仮託した背景をもつ巻である。「八重葎」に関しては、古今集(3)の「今さらにとふべき人もおもほえず八重葎して門閉せりて

へ」（巻十八、雑歌下、九七五、読み人しらず）や、貫之集[4]の「訪ふ人もなき宿なれど来る春は八重葎にもさはらざりけり」（第二、二〇七）の歌が引き歌として存在していることからも、象徴性の強い表現だと考えられる。すなわち、末摘花巻では、零落の状況を象徴するものとして、甘美な幻想を踏まえての「浅茅」「葎」の語が隠喩として用いられたと解釈すると、蓬生巻における「蓬」の語例は、より現実的な、末摘花のおかれた現状を表象する用語だと理解されるのである。

その「蓬生」の廃墟となった邸宅は、末摘花の兄である禅師の君も無力なため荒廃にまかされてゆくありさまであった。

はかなきことにてもとぶらひきこゆる人はなき御身なり。ただ御兄弟の禅師の君ばかりぞ、まれにも京に出でたまふ時はさしのぞきたまへど、それも世になき古めき人にて、同じき法師といふ中にも、たづきなくこの世を離れたる聖にものしたまひて、しげき草蓬をだにかき払はむものとも思ひよりたまはず。（蓬生）

この描写において、源氏の須磨流離時代の末摘花の邸宅の荒廃について、「蓬生」という成語ではなく、一語で用いられる「蓬」の例が初めて登場することになる。続いて、前述の「しげき蓬は軒をあらそひて生ひのぼる」という、「しげき草」としての「蓬」の用例があり、荒れまさる常陸宮邸が描出される。さらに、冬の常陸宮邸の情景は、「霜月ばかりになれば、雪、霰がちにて、外には消ゆる間もあるを、朝日夕日をふせぐ蓬、葎の蔭に深う積もりて」とあるように、わびしく雪にうもれて荒涼たる様相を呈しているのである。

帰京した源氏が再び常陸宮邸を思い出すのは、花散里を訪れる途中に邸前を偶然にも通りかかった折のことであった。惟光が先に邸内に入り様子を探るのだが、案内を請う惟光に対して、邸内の女房は「変らせたまふ御ありさまならば、かかる浅茅が原をうつろひたまはでははべりなんや」と、ひたすらに源氏の帰京を待っている末摘花の貞節を伝えた。この場面では、邸宅の形容に「蓬」ではなく、「浅茅が原」という象徴性のある成語が用いられていることになる。その理由は、この言葉が、末摘花の現在は、源氏の庇護を受けていたあの末摘花巻のころから継続した時間のなかにあることを、女房たちが力説している内容だからであろう。末摘花巻における、彼女の高貴にして無垢な虚像が、この場面にも投影されているがゆえに、「浅茅が原」の形容が用いられていると解釈されるのである。

惟光は、このように末摘花の様子を先に探ってくるのだが、その惟光に対して源氏は、「などかいと久しかりつる。いかにぞ。昔の跡も見えぬ蓬のしげさかな」と問いかける。次いで、惟光が「さらにえ分けさせたまふまじき蓬の露けさになむはべる。露すこし払はせてなむ入らせたまふべき」と進言する。その進言に従って露を払いつつ邸内に入る源氏は、「たづねてもわれこそとはめ道もなく深き蓬のもとの心を」と独り言の歌を詠む。源氏は、末摘花の貞節に応えて、「下部どもなど遣はして、蓬払はせ、めぐりの見苦しきに板垣といふものう

三

ち堅め繕はせたまふ」と描写されているように、邸宅を修繕するなどして彼女を手厚く庇護することになる。その源氏の庇護に対して、常陸宮邸の女房たちは、「かくあやしき蓬のもとには置きどころなきまで、女ばらも空を仰ぎてなむ、そなたに向きてよろこびきこえける」と歓喜する。

このように、蓬生巻には、「蓬生」の用例は使用されておらず、常陸宮邸の描写においては、「蓬」の一語の用例のみが使われているのである。しかも、その「蓬」は、源氏の邸宅への入来のおりに蓬の露を払う場面や、邸宅の修繕に際しての「蓬払はせ」という様子からも、実景を反映するものであると捉えられる。蓬生巻の常陸宮邸の荒廃の描写には、「浅茅」(一例)、「浅茅が原」(一例)、「葎」(二例)、「蓬」(八例)が用いられているが、このうち、「蓬」を一語のみで使用した例は、源氏物語のなかでも、蓬生巻のこの常陸宮邸の情景描写において初めて登場していることになる。また、「浅茅」と「葎」とのそれぞれの用いられ方をみると、その場面に「かかるままに、浅茅は庭の面も見えず、しげき蓬は軒をあらそひて生ひのぼる。葎は西東の御門を閉ぢ籠めたるぞ頼もしけれど」「朝日夕日をふせぐ蓬、葎の蔭に深う積もりて」とあるように、いずれも「蓬」との対句的表現となっていることに注意したい。すなわち、ここでの荒廃の景は、巻名に象徴されるように、「蓬」が中心であり、「浅茅生」「葎の門」「蓬生」といった歌ことば的成語ではなく、「浅茅」「葎」「蓬」とそれぞれ一語で表現されているように、具体的な実景を伴う表象でもあることが確認されるのである。

『枕草子』[5]六六段は、「草は」と始まる章段であるが、そこでは、「蓬、いみじうをかし」「浅茅、いとをかし」と記され、「八重むぐら」の名も挙げてある。また、一一九段の「あはれなるもの」の章段には、「秋ふかき庭の浅茅に、露のいろいろ、玉のやうにて置きたる」との描写がみえているが、その章段にのちに増補されたとおぼしき部分には、「荒れたる家の蓬ふかく、葎這ひたる庭に、月のくまなくあかくすみのぼりて見ゆる」ともある。ここでは、荒廃の景としての「浅茅」と「露」、「蓬」「葎」と「月光」という組み合わせの定着化が知られるが、同時に、それらの植物が具体的景物として認識されていたことが窺えよう。

蓬生巻に描かれた常陸宮邸は、時勢に置き去りにされたまま、召使たちにも去られ、人外のものたちの集う廃邸に変わり果てている。その廃邸に埋もれて過ごす末摘花は、しかしながら、古風な教養に生きる道を捨ててはいない。末摘花巻における末摘花の描かれ方は、孤独で不安な境遇の姫君ではあるが、その容貌の醜さにも焦点の当てられたものであった。それに対して蓬生巻の末摘花像には、醜女の面影はない。そこで強調されているのは、心高く父母の遺風を遵守して生きるその姿勢なのである。名門の家門の余儀ない零落の運命と、その零落にあって運命に耐えるその姫君の姿こそが、蓬生巻の主題であり、その姿を象徴する具体的景物が、草深い邸宅に繁る「蓬」だと理解さ

れるのである。「浅茅生」「浅茅が原」「葎の門」「葎の宿」「八重葎」などの用例は、歌ことば的な成語ともなっているもので、荒廃の景の具体的描写というより、荒廃にいたる零落の境遇の象徴的表現であり、隠喩的要素の強いものであろう。それに対して、蓬生巻における常陸宮邸の荒廃を形容する「蓬」の語は、草深い廃墟となった父宮の旧邸に琴を友として暮らす姫君の忍耐やその運命を語る、現実の景物として捉えることができるのである。

二

「蓬」の語例は、蓬生巻のほか、松風巻、朝顔巻、柏木巻、東屋巻に、それぞれ一例ずつみえている。松風巻では、明石上の父である入道の言葉、「身のつたなかりける際の思ひ知らるること多かりしかば、さらに都に帰りて、古受領の沈めるたぐひにて、貧しき家の蓬葎どものありさまあらたむることもなきものから」のなかで、貧しい家の荒れ果てた様を卑下して表現するものとして用いられている。朝顔巻の場合、朝顔君は、藤壺の崩御に前後して世を去った父君の喪に服して斎院を退くのだが、その朝顔君が住む桃園宮を訪れた源氏が門前で口ずさんだ歌、「いつのまに蓬がもととむすぼほれ雪ふる里と荒れし垣根ぞ」において、桃園宮の荒廃を表象する「蓬」の使用例が認められる。柏木巻では、柏木亡き後、落葉宮の住む一条宮を、夕霧が訪ねる場面での、「庭もやうやう青み出づる若草見えわたり、ここかしこの砂子薄き物の隠れの方に、蓬も所得顔なり」という描写において、初夏の明るさのなかに照らしだされる、悲嘆のうちに荒廃した邸内を、具体的に表現する景物としての「蓬」の用例が確認できる。これは、人の没後の荒廃の景をいうものでもある。これらの「蓬」の語例はいずれも、邸宅の主の、不遇による零落を象徴する景物として理解されるものであるが、源氏物語においては、実景としての要素も認められることになるだろう。

東屋巻にみられるのは、「蓬のまろ寝」という成句での用例である。宿木巻で薫に垣間見られた浮舟が、東屋巻では全貌を現して、やがて薫の庇護下に入るまでの物語が、彼女の側から語られてゆくことになる。浮舟は、その身を寄せた二条院で匂宮の目にとまり言い寄られるが、そのことを知った中将の君のはからいで、三条の小家に隠れた。弁の尼の手引きでこの隠れ家を訪れた薫は、浮舟を宇治の地に住まわせることになる。次に引くのは、その隠れ家を出る場面である。

ほどもなう明けぬる心地するに、鶏などは鳴かで、大路近き所に、おぼとれたる声して、いかにとか聞きも知らぬ名のりをして、うち群れて行くなどぞ聞こゆる。かやうの朝ぼらけに見れば、物戴きたる者の鬼のやうなるぞかしと聞きたまふも、かかる蓬のまろ寝にな

らひたまはぬ心地もをかしくもありけり。宿直人も門開けて出づる音す。おのおの入りて臥しなどするを聞きたまひて、人召して、車、妻戸に寄せさせたまふ。かき抱きて乗せたまひつ。（東屋）

「蓬」の成語としては、蓬が杣山のように生い茂った所をいう「蓬が杣」（後拾遺集、二七三）、蓬が生い茂って荒れた家をいう「蓬の宿」（後拾遺集、九五五）のほか、「蓬が露」（新古今和歌集、一六八二）、「蓬が門」（壬二集、一一二五）、「蓬が庭」（続千載集、四七六）、「蓬の原」（恵慶法師集、一九二）そして「蓬生」などがあるが、「蓬のまろ寝」はそのような所に泊まることをいうと解釈される。

「蓬のまろ寝」については、『紫明抄』『河海抄』『珊瑚秘抄』などの古注釈書に諸説がみえている。そのなかで、『花鳥余情』[6]の、「よもぎはただよもぎふのやどのこころにてこそあらめ。あれたる所に一宿するをよもぎのまろねといはんはさらにたがひ侍るまじきにや」という、蓬生の宿すなわち蓬の生い茂る荒れた邸宅での仮寝という説や、『細流抄』[7]の、「只蓬生の宿にねたる義を用ふべし」などが定説とされている。

「まろ寝」は、万葉集[8]に用例のある歌語で、「末呂宿」（四一一三）、「丸宿」（一三〇五）、「丸寐」（一七八七）、「丸寝」（三一四五）の表記があり、同義で「まるね」の用例に「麻流禰」（四四一六・四四二〇）がみえている。その意味は、帯も解かず着たままで仮寝をすること、また、旅先などで夜も着たものを着替えないでそのまま寝ること、あるいは、旅寝、独り寝を指すこともある。大伴家持が越中の国司に在任中に詠んだ長歌、「大君の　遠の朝廷と　任きたまふ　官のまにま　み雪ふる　越に下り来　あらたまの　年の五年　しきたへの　手枕まかず　紐解かず　丸寝をすれば〈略〉」（巻十八、四一一三）の場合は、妻の手枕をして寝ることも、相手の紐を解くこともない、旅先の独り寝をいうものと解釈される。ここにみる「紐解かず」から「丸寝をすれば」に続く表現は、笠金村の長歌、「うつせみの　世の人なれば　大君の　命恐み　磯城島の　大和の国の　石上　布留の里に　紐解かず　丸寝をすれば〈略〉」（巻九、一七八七）にも同様にみられるものである。また、万葉集における「丸寝」の用例はいずれも、「紐解く」（一三〇五・三一四五・四四一六）、もしくは、「紐たつ」（四四二〇）の語句とともに用いられており、旅寝であることも共通している。万葉集におけるこれらの「丸寝」の用例は、旅の仮寝における独り寝を意味するものだが、このことは、源氏物語の「蓬のまろ寝」の定説とも整合性をもつものであろう。

万葉集における「蓬」の例は、大伴家持の長歌に一例が確認できるが、それは次のような歌である。

大君の　任きのまにまに　取り持ちて　仕ふる国の　年の内の　事かたね持ち　玉桙の　道に出で立ち　岩根踏み　山越え野行き　都辺に　参ゐし我が背を　あらたまの　年行き反り　月重ね　見ぬ日さまねみ　恋ふるそら　安くしあらねば　ほととぎす　来鳴く五月

の　あやめぐさ　蓬かづらき　酒みづき　遊び和ぐれど　射水川　雪消溢りて　行く水の　いや増しにのみ〈略〉（巻十八、四一一六）

この長歌は、詞書によると、天平十二年（七四〇）に久米朝臣広縄が朝集使となって上京したが、その任が終わって翌年本務に帰任したので、長官の家持が自分の館で詩酒の宴を設けた、そのおりに家持が詠んだものということである。この歌では、「蓬」は、「蓬かづらき」と成語で表現されているのだが、集中には同じく家持の歌の「しなざかる越の君らとかくしこそ柳かづらき楽しく遊ばめ」（巻十八、四〇七一）に「柳かづらき」という同様の構成の成語もみえている。「かづらく」は、蔓性植物の類を頭に載せる髪飾りとなるよう冠状にすることをいうもので、ここでは、縵にする植物に「蓬」と「柳」とがあったことがわかる。「蓬」は、その香りの強さから邪気を払う霊力があると思われ、端午の節句にも利用されたというが、「蓬かづらき」の成語にも、その霊力をも身につける意識はあったと考えられるが、そこに荒廃の景のイメージは認められない。万葉集の「蓬」の語例は、植物の生成力とその香りのもたらす霊力、あるいは多年草としての旺盛な生命力の象徴として用いられているのであり、荒廃の表象と理解される用例は確認されないのである。

源氏物語東屋巻の「蓬のまろ寝」の用例については、万葉集の「丸寝」の用語例をうけて、そこに荒廃のイメージのある「蓬」の語を重ねたものだと考えると、定説どおりの解釈となるのだが、本居宣長の『玉の小櫛』[9]に「きこえぬ事也、もじの誤などにや」との指摘もあるように、語意については、なお検討の余地が残るものであろう。これが孤例であることと、東屋巻という、隠れ家に思いがけない美女を発見するという、夕顔巻や末摘花巻を貫くテーマが同様に生かされている巻であることを考え合わせると、古注にもみられるように漢詩の先例の可能性なども想像されるのである。[10]

源氏物語において、荒廃の景の表象として描かれる「蓬生」の語例は、桐壺巻、若紫巻、横笛巻にそれぞれ一例ずつ、計三例を数える。桐壺巻では、桐壺更衣亡きあとの更衣の母の里邸の描写に「蓬生」が用いられているのだが、この里邸が源氏物語に登場する最初の荒廃する邸宅であり、その荒廃の表象に「八重葎」「蓬生」「浅茅生」（二例）が用いられているのである。更衣の母は、桐壺帝からの使者である靫負の命婦を迎えて、「今までとまりはべるがいと憂きを、かかる御使いの蓬生の露分け入りたまふにつけても、いと恥づかしうなん」と語る。ここでの露は、秋の季節の草に置く露をいうとともに、悲しみのうちに涙がちになる更衣の母の心理状態が重ねられたものだということになる。「蓬」と「露」との取り合わせは、紫式部集[11]の和歌にも見えており、その「露しげき蓬が中の虫の音をおぼろげにてや人の訪ねん」（紫式部集、三）は、千載集にも採られているものである。[12]『河海抄』には、「蓬生」の語の引き歌として、拾遺集[13]の「いかでかは訪ねきつらん蓬生の人も通はぬわが宿の道」（巻十八、雑賀、題不知、詠人不知、一二〇三）が採られている。

七

八

和歌において、「蓬」の語が単独で用いられている例は数が少なく、万葉集に一例をみるだけであり、勅撰集においても、新古今集[14]にいたってはじめて、「庭の面にしげる蓬にことよせて心のままに置ける露かな」（巻五、秋歌下、基俊、四六七）、「尋ねても袖にかくべきかたぞなき深き蓬の露のかごとを」（巻十四、恋歌四、左衛門督通光、一二八八）の二例が確認される状況である。四六七番の歌には、「閑庭露しげし」といふことを」と詞書がつけられており、このころには、「露しげき閑庭」という情景が歌題として成立していることが知られる。また、一二八八番の通光の歌は、前節で述べた源氏物語蓬生巻における源氏の詠んだ独り言の歌、「たづねてもわれこそとはめ道もなく深き蓬のもとの心を」を本歌とするものであり、「露のかごと」という表現についても、同じく源氏物語の夕顔巻にみる、「ほのかにも軒端の荻を結ばずは露のかごとを何にかけまし」という、軒端荻への恨みを言った源氏の歌が本歌であるとみなされる。

勅撰集における、「蓬生」の成語での用例の初出は、前述の拾遺集所収の『河海抄』が引き歌とした一二〇三番の歌である。その後、千載集に三首、新古今集に四首という数が確認できる。『河海抄』[15]には、蓬生巻に「蓬生」の語が存在しないことに触れて、「蓬生」について、「此巻中無二蓬生之詞一、惣常陸宮旧跡蓬競レ簷而生昇とみえたり。歌に、しげきよもぎの露のかごとを、と詠レ之、蓬生同事也。蓬生事、杜詩曰、蓬生非レ無レ根、漂蕩随二高風一、天寒落二万里一、不三復帰二本叢一、客子念二故宅一、三年門巷空、此詩心詞自相通乎。拾遺いかでかく尋ねきぬらんよもぎふの人もかよはぬ我がやどの道」と記されている。『合本源氏物語事典』では、杜甫の詩は、「遣レ興」三首のうちの一節とある。『河海抄』が、蓬生巻について拾遺集の歌、

いかでかは訪ねきつらん蓬生の人も通はぬわが宿の道（巻十八、雑賀、題不知、詠人不知、一二〇三）

に注目しているのは、この歌が、勅撰集における「蓬生」の語を詠んだ最初の例とみなされるからであろう。これ以降の勅撰集における「蓬生」を詠んだ歌は次のようである。

八重葎さしこもりにし蓬生にいかでか秋のわけて来つらん（千載集、巻四、秋歌上、皇太后宮大夫俊成、二二九）

かくしつつついにとまらむ蓬生の思ひしらるる草枕かな（千載集、巻八、羇旅歌、円玄法師、五三七）

分けわびていとひし庭の蓬生もかれぬと思ふあはれなりけり（千載集、巻十七、雑歌中、法眼兼覚、一一四五）

秋更けぬ鳴けや霜夜のきりぎりすやや影寒し蓬生の月（新古今集、巻五、秋歌下、後鳥羽院、五一七）

蓬生にいつか置くべき露の身は今日の夕暮明日のあけぼの（新古今集、巻八、哀傷歌、前大僧正慈円、八三四）

人ぞ憂き頼めぬ月はめぐり来て昔忘れぬ蓬生の宿（新古今集、巻十四、恋歌四、藤原秀能、一二八一）

ならひ来したが偽りもまだ知らで待つとせし間の庭の蓬生（新古今集、巻十四、恋歌四、皇太后宮大夫俊成女、一二八五）

これらを見ると、拾遺集の「蓬生」の歌を本歌とするものはなく、その後の影響はほとんど感じられないといってよいだろう。「蓬」の語例では、源氏以降には、源氏物語の歌を本歌とする傾向もみられたが、その用例も多くはない。『河海抄』が、拾遺集の歌を引き歌とみなした背景には、その語例の少なさも影響していたであろうと思われるのである。

若紫巻では、紫の上の祖父にあたる故按察大納言邸について「蓬生」の語が使われている。紫の上の住む故大納言の家に、源氏からの手紙を惟光が持って行ったときに、紫の上の侍女である少納言が、「宮より、明日にはかに御迎へにとのたまはせたりつれば、心あわたたしくてなむ。年ごろの蓬生をかれなむも、さすがに心細う、さぶらふ人々も思ひ乱れて」と言葉少なに語るのである。「宮」は紫の上の父宮をいう。「蓬生」に続く「かれなむ」の語句は、「枯れる」「離れる」との掛詞になっており、「かれる」は蓬の縁語でもある。千載集[16]所収の法眼兼覚の歌、「わけわびていとひし庭の蓬生もかれぬと思ふはあはれなりけり」（巻十七、雑歌中、一一四五）には、この「蓬生」と「かれる」の取り合わせをみることができる。

横笛巻における「蓬生」の用例は、落葉宮が母の一条御息所と住む一条宮について形容したものである。その邸は、一条御息所の言葉において「かかる蓬生に埋もるるもあはれに見たまふるを」と描かれているが、同時に、御息所から夕霧への歌においては、「露しげきむぐらの宿にいにしへの秋にかはらぬ虫の声かな[17]」と、「葎の宿」とも表現されている。朱雀院の第二皇女である落葉宮は、柏木亡きあと、一条宮のひっそりと落ち着いた静けさのなかに暮らしている。その邸はまず、「うち荒れたる心地すれど、あてに気高く住みなしたまひて、前栽の花ども、虫の音しげき野辺とみだれたる」と述べられる。ここで表現されている「虫の音しげき野辺」は、古今集の「君が植ゑしひとむらすすき虫の音のしげき野辺ともなりにけるかな」（巻十六、哀傷歌、御春有助、八五三）を引くものとされるので、この情景の背景には「一叢薄」が暗示されていることになるだろう。横笛巻では、しめやかななかにも高雅な邸の様子が、「蓬生」「葎の宿」、間接的に「一叢薄」の成語によって伝えられていることになる。これらの歌ことば的な成語は、実景以上に、象徴性をもつものであることは、前節で述べたとおりである。

三

源氏物語における「薄」の用例はいずれも成語であり、「一叢薄」が二例、「篠薄」が二例ある。そのほかに、「薄」の別名である「尾

花」が一例みえる。秋の七草のひとつに数えられる「薄」は、古歌では「花薄」の語が多く用いられるほか、「むらすすき」「薄野」「薄原」などの成語の用例もみえる。『枕草子』六七段の「草の花は」の章段には、「秋の野のおしなべたるをかしさは、薄こそあれ。穂さきの蘇枋にいと濃きが、朝霧にぬれてうちなびきたるは、さばかりの物やはある」とあり、朝霧に靡く薄の風情が秋の景物の最たるものとみなされている。

源氏物語で、「一叢薄」の用例が使われているのは、藤裏葉巻と柏木巻で、それぞれに一例ずつみえる。藤裏葉巻では、夕霧の祖母にあたる故大宮の旧邸である三条宮の描写に、「前栽どもなど小さき木どもなりしも、いと繁き蔭となり、一叢薄も心にまかせて乱れたりける、つくろはせたまふ」とある。その邸宅が、「すこし荒れにたるを、いとめでたく修理しなして」という事情で庭の手入れをしているわけだが、「薄」は前栽に植えられた植物であり、鑑賞用であったものであろう。

柏木巻での描写も同様に、「一叢薄」は前栽に植え込まれたものになっている。その場所は、落葉宮の住む一条宮である。

かの一条宮にも、常にとぶらひきこえたまふ。四月ばかりの空は、そこはかとなう心地よげに、一つ色なる四方の梢もをかしう見えわたるを、もの思ふ宿は、よろづのことにつけて静かに心細う暮らしかねたまふに、例の、渡りたまへり。庭もやうやう青み出づる若草見えわたり、ここかしこの砂子薄き物の隠れの方に、蓬も所得顔なり。前栽に心入れてつくろひたまひしも、心にまかせて茂りあひ、一叢薄も頼もしげにひろごりて、虫の音添へむ秋思ひやらるるより、いとものあはれに露けくて、分け入りたまふ。（柏木）

「一叢薄」は、ひとかたまりに生えている薄という意味だが、この場面の引き歌には、前節でも触れたように『古今集』の、「君が植ゑしひとむらすすき虫の音のしげき野辺ともなりにけるかな」（巻十六、哀傷歌、御春有助、八五三）が挙げられる。故人の邸宅を主題としたこの歌によって、庭前の植え込みである「一叢薄」が、故人の表象となるのである。藤裏葉巻では、「一叢薄」は亡き祖母の大宮を偲ぶものであり、柏木巻では、亡き柏木を偲ぶものだと受け取れることになる。

「篠薄」の用例二例と、「尾花」の用例は、ともに宿木巻にみえている。「篠薄」は、まだ穂の出ていない薄の称といい、「尾花」は、穂の出た薄、または、薄の花穂の称という。宿木の巻において匂宮は、妻である中の君が薫と文を交わしていることで二人の仲に疑念を抱く。だが、そのことがかえって中の君への愛情を深める契機となるのである。その場面では、まず秋の景が、「枯れ枯れなる前栽の中に、尾花の、物よりことに手をさし出でて招くがをかしく見ゆるに、まだ穂に出でさしたるも、露をつらぬきとむる玉の緒、はかなげにうちなびきたるなど、例のことなれど、夕風なほあはれなるころかし」と描出される。そして、匂宮の歌、「穂にいでぬもの思ふらししのすすき

招くたもとの露しげくして」へと続くのである。匂宮は、中の君が薫の誘いに対して靡く心があるとして、それを「篠薄」に見立てているのであって、「招くたもと」は誘いをかけている薫を暗示し、「しげく」とは薫の便りが頻繁であることをいうものである。この場面、すなわち、秋の叙景から匂宮の歌にかけては、古今集の、「秋の野の草の袂か花すすき穂にいでて招く袖と見ゆらむ」（巻四、秋上、在原棟梁、二四三）が投影されていると思われる。同じく古今集の墨滅歌、「吾妹子に逢坂山の篠すすき穂にはいでずも恋ひわたるかな」（巻十一、恋歌一、読人不知、一一〇七）は、万葉集に類歌、「我妹子に逢坂山のはだすすき穂には咲き出でず恋ひ渡るかも」（巻十、秋の相聞、読人不知、二二八三）のあるものだが、この歌によると、「篠すすき」は忍ぶ恋を表象するものになる。匂宮の歌に対する中の君の返歌、「秋はつる野辺のけしきもしのすすきほのめく風につけてこそ知れ」は、匂宮への恨み言を述べたものである。「秋」は「飽き」の掛詞で、「野辺のけしき」は匂宮のことを指し、そのそぶりから匂宮の心が六の君に移ったことが知られるという、匂宮の態度を恨めしく思っている気持ちを伝えたものと解される。古歌では、古今集の在原棟梁の歌にみるように、薄の風に靡くさまを、「人を招く」意に多く歌われており、匂宮と中の君とが詠み交わした歌の場合も、その意味合いを含むものであることは明らかであろう。

源氏物語における「薄」の語例は、「尾花」を除けばいずれも歌ことば的成語で使用されており、その意味では、具体的叙景というより象徴的表現として捉えられることになる。また、直接的な荒廃の景の表象というよりも、故人を偲ぶ表象や、忍ぶ恋の表象、あるいは、人を招く姿を具象する風景として描かれているのである。その意味合いをもつ歌としては次のような例が指摘できるだろう。

夕日さす裾野のすすき片寄りに招くや秋を送るなるらん（後拾遺集[18]、巻五、秋下、源頼綱朝臣、三七一）

朽ちもせぬその名ばかりをとどめ置きて枯野の薄形見にぞ見る（新古今集、巻八、哀傷歌、西行法師、七九五）

人ならば語らふべきを思ふことすすきはそよといふかひなきぞ（好忠集[19]、二一〇）

故郷のひとむらすすきたれ植ゑしあるじ恋しき虫の声かな（拾玉集[20]、第四、四五〇三）

和歌において、単なる叙景表現として描かれている「薄」の例は、例えば、古今集の、

今よりはつぎて降らなむわがやどのすすきおしなみ降れる白雪（巻六、冬歌、読人不知、三一七）

の歌などにもみえているが、古くは万葉集における「薄」の用例にも、客観的な荒野の景物としてのそれが多く描かれている。柿本人麻呂による、「軽皇子、安騎の野に宿らせる時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌」の題詞をもつ長歌はその代表的なものであろう。

やすみしし　我が大君　高照らす　日の皇子　神ながら　神さびせすと　太敷かす　京を置きて　こもりくの　伯瀬の山は　真木立つ

荒き山道を　岩が根　禁樹押しなべ　坂鳥の　朝越えまして　玉かぎる　夕さり来れば　み雪降る　安騎の大野に　はたすすき　篠を押しなべ　草枕　旅宿りせす　古思ひて（巻一、雑歌、四五）

ここで詠まれている「はたすすき」は、その穂が旗のようになびいている薄の意味だが、初瀬の山道を進んだ先に広がる、安騎の大野の荒涼たる景色を伝える叙景表現と捉えることができよう。

源氏物語における風景が、単なる叙景表現ではなく、登場人物の心象と分かちがたく結びついていることは、すでに定説となっており、「風景」に関する考察もなされてきている。[21] 廃墟の風景においては、その「風景」の構成要素である「浅茅」「葎」「蓬」「薄」のそれぞれの語について、自然の景としての描写がある一方、自然描写に限定されない心象風景すなわち、登場人物の心のはたらきを象徴する景物として捉えられている現象が確認できるのである。源氏物語における廃墟の景物である、「浅茅」「葎」「蓬」「薄」はそれぞれに物語中での機能を担う表現であり、単独の語で表現する場合と、歌ことば的成語で表現される場合とに連関があることも指摘しておきたい。

【注】

(1) 源氏物語の引用は、日本古典文学全集（小学館）による。

(2) 拙稿「源氏物語における廃墟の風景(1)」（『星稜論苑』第39号、星稜女子短期大学経営学会、平成23）

(3) 古今集の引用は、日本古典文学全集（小学館）による。歌番号もそれに従う。

(4) 貫之集の引用は、新編国歌大観による。歌番号もそれに従う。表記は、適宜に漢字表記を施している。

(5) 『枕草子』の引用は、日本古典文学大系（岩波書店）による。

(6) 『花鳥余情』の引用は、源氏物語古注釈集成（桜楓社）による。

(7) 『細流抄』の引用は、源氏物語古注釈集成（桜楓社）による。

(8) 万葉集の引用は、日本古典文学全集（小学館）による。歌番号もそれに従う。また、特に断らない限り、以下の万葉集の引用も同様である。

(9) 『源氏物語玉の小櫛』の引用は、本居宣長全集（筑摩書房）による。

(10) 池田亀鑑編『合本源氏物語事典』（東京堂出版）語彙編の蓬の項には、「蓬のまろ寝」について、『珊瑚秘抄』に「太平御覧東都曹徳詩云、転蓬造車、輪のまろきがごとく蓬の葉のゆくを見て車をつくるなり」という記述があることと、『河海抄』にも車の心説があることが記されている。

(11) 紫式部集の引用は、新編国歌大観による。歌番号もそれに従う。表記は、適宜に漢字表記を施している。

(12) 千載集、巻十六、雑歌上、紫式部、九七七番、詞書には、「上東門院に侍りけるを、さとにいでたりけるころ、女房のせうそこのついでに筝のことつたへにまうでこんといひて侍りける返事につかはしける」とある。

(13) 拾遺集の引用は、新編国歌大観による。歌番号もそれに従う。表記は、適宜に漢字表記を施している。

(14) 新古今集の引用は、日本古典文学全集（小学館）による。歌番号もそれに従う。

(15) 『河海抄』の引用は、『紫明抄・河海抄』（角川書店）による。

(16) 千載集の引用は、新編国歌大観による。歌番号もそれに従う。表記は、適宜に漢字表記を施している。

(17) 源氏物語中のこの「露しげきむぐらの宿にいにしへの秋にかはらぬ虫の声かな」の歌は、注(11)でも触れた、紫式部集所収の「露しげき蓬が中の虫の音をおぼろげにてや人の訪ねん」（紫式部集、三）の類歌ともみなされる。

(18) 後拾遺集の引用は、新編国歌大観による。歌番号もそれに従う。表記は、適宜に漢字表記を施している。

(19) 好忠集の引用は、新編国歌大観による。歌番号もそれに従う。表記は、適宜に漢字表記を施している。

(20) 拾玉集の引用は、新編国歌大観による。歌番号もそれに従う。表記は、適宜に漢字表記を施している。

(21) 参照とする先行研究は次のとおりである。

①柄谷行人『日本近代文学の起源』（講談社　昭55）

②富士川義之『風景と詩学』（白水社　昭58）

③小町谷照彦「風景の解読―『総角』巻の表現構造」（『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会　昭59）

④小町谷照彦「レトリックとしての歌ことば―薫の大君への結婚の形象」（『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会　昭59）

⑤高橋文二『風景と共感覚―王朝文学試論』（春秋社　昭60）

⑥三田村雅子「〈声〉を聞く人々」（『物語研究』一　新時代社　昭61）

⑦清水婦久子『源氏物語の風景と和歌増補版』（和泉書院　平20）